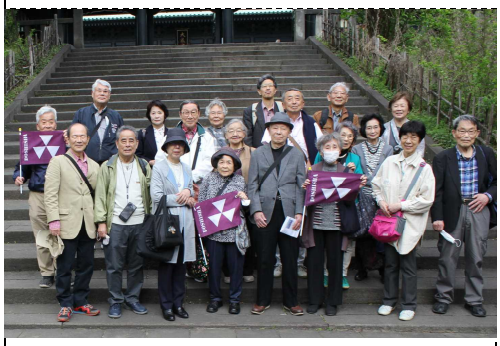
東京新島研究会だより №８７　　発行：２０２３．４．１４

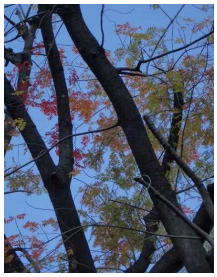
良心の碑（いしぶみ）



昌平黌・神田明神 見学会

日　時：４月６日(木) １３時から１５時
案内人：江澤香・支倉清
受　付：末松建樹　　誘　導：宇野多恵子

楷（かい）の木　中国山東省にある孔子の墓所に、弟子の子貢が植えた楷の木があるそうです。この木は昌平黌はもとより各地の孔子廟に植えられました。「学問の木」とも「孔子の木」ともいわれます。見学のとき、やっと若葉が出たところでした。



▲紅葉した楷の木

世界一大きな孔子像

１９７５年中華民国（台湾）台北市のライオンズクラブから贈られた孔子像です。

１９７１年中国が国連加盟（台湾政府は代表権を失う）、１９７２年日中国交回復という世界史的な流れの中での寄贈でした。

佐藤一斎『言志四録』

「少にして学べば即ち壮にして為すことあり。壮にして学べば即ち老いて衰えず。老いて学べば即ち死して朽ちず」

昌平黌の儒官佐藤一斎（1772 ～ 1859）の言葉です。要するに生涯学び続けなさいということ。幕末に生涯学習社会の到来を宣言した言葉といえるでしょう。

新島兄弟と昌平黌

キリスト教と西洋文化に関心が高かった兄･七五三太は儒学を講ずる昌平黌に入門しませんでした。兄以上に早期英才教育をたたき込まれた雙六は父の期待の応えて昌平黌に入門しましたが、入門直後に病死してしまいました。

変質する昌平黌の教育

身分制社会において教育の目的は高潔な人格を養うことでしたから、知識を身につけることは二の次でした。ところが、江戸後期になると昌平黌で「学問吟味」とよばれる試験が実施され、成績優秀者が幕府に登用されるようになります。また、佐藤一斎は朱子学のみに拘泥せず、陽明学も採り入れましたから、昌平黌は内容的にも制度的にも近代社会に適応すべく変質したといえるでしょう。

将門の首塚

大手町一丁目に平将門の首塚があります。神田明神は将門が「祟らないように」と、将門の霊を祀った神社です。

徳川幕府は江戸城を拡張する際に神社を現在地に移転させたのですが、祟りを恐れて首塚は移すことはできませんでした。終戦後の東京復興計画でも5年ほど前の三井物産本社建て替え時にも将門の祟りを恐れて首塚を動かすことができませんでした。

天野屋

神田明神鳥居の横に店を構える天野屋（甘酒屋）は 1846 年、新島七五三太が 3 歳のときの創業ですから、七五三太が祖父弁治・父民治に連れられて「のれんをくぐった」ことと思われます。

はやり神様・仏様

新島襄が暮らした江戸のまちに、一時的に流行っては廃れる神様・仏様がたくさん出現しました。神田明神前で１４歳の少年・定吉に野狐が憑依したことにより創建された定吉稲荷はその典型です。既存の権威や秩序が崩壊するなかで人びとの不安が増大したことが背景にあると考えられています。

（文責:支倉清　写真:木原康博・江澤香）

5月例会

日時：５月２３日(火)午後２時から
会場：同志社大学東京オフィス
内容：研究発表（支倉　清）
テーマ「新島襄の受けた寺子屋教育」
新島民治「弟子衆名前控」から見えてくる寺子屋教育の実態を検討します。
役割分担
受付：河合式子・篠塚陽子・夏原知子
司会：佐々木博子　聖書朗読：片桐陽
祈祷：小﨑敬子
写真：徳弘篤介・木原康博
【おことわり】５月は加藤聖子さんの「湯浅八郎」を予定していましたが、都合により変更になりました。

窓　徳富蘇峰が亡くなる１０日ほど前の談話。「私は明らかに有神論者であり、キリスト教徒である。今や平安のうちに神を信ずる者として間もなく新島先生に天上で会うべく、神の御許（みもと）に行きたい」。

蘇峰は同志社を中退するとき教会籍を返上してキリスト教から離れた。しかしその後も自分はキリスト教ではないが「新島教」であると公言した。そして最晩年キリスト教に復帰した。

当会を立ち上げた西村四郎氏もほとんど「新島教」である。体調が元に戻り会長に復帰する際、「西村さん、また会長をお願いできますか」と問われて、「断ったら、あの世へいったとき新島先生に叱られてしまうがな」と返答した。

わたしは１５年前、本井康博先生（当時、神学部教授）が案内人を務める「新島襄の足跡を訪ねるボストン旅行」に参加させていただくために当会に入会した。ボストン旅行中、参加者全員が「新島先生」と敬愛をこめて呼んでいた。同行した妻は「新島教団ね」とささやいた。

ところが最近は「新島先生」と呼ぶ人が少数派になった。本井先生も１０年前「新島襄はもはや歴史上の人物ですから先生という敬称は省略します」と宣言した。当会は会則で「新島襄先生の事跡を研究し、顕彰することを目的とする」と謳っているが、「先生を顕彰する」から「人物を研究する」へとスタンスが変化してきたようである。

さびしい気もするが、自由に「新島襄」を語れるようになったことは喜ばしい。　（支倉清）